

今年夏の夏秋果菜類の行方

夏から秋は、北関東から東北地方にかけての夏秋野菜の本格シーズンである。しかし今年は、春から初夏に西南暖地から関東産へなかなか切り替わらなという例年にない出荷パターン、相場推移となった。北関東から福島にかけての野菜類に対する潜在的な敬遠気運を背景に納入業者へ西の産地のものを

優先してほしいと露骨に要求する需要者も少なくなかったためである。すでに夏本番で、産地は関東や東北に移っており、産地の代替が利かない時期だが、福島を中心とする風評の強い産地がどこまで頑張れるか、他の産地がどんな代替機能を発揮するか、今年の夏秋野菜類の販売状況を注意深く見守りたい。

トマト

【概況】
初夏まで九州産の出荷が続く。今後は北東北や北海道産のウエイト増か

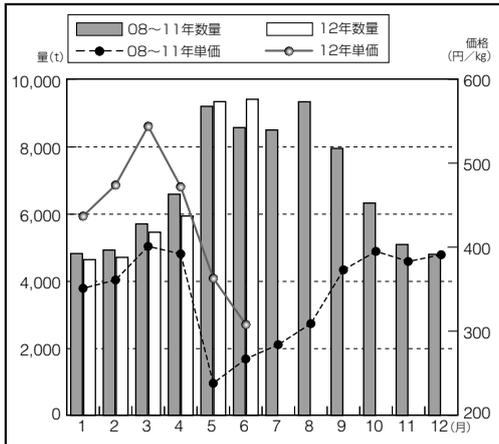
東京市場で春まで供給を受け持つ熊本産や愛知産は6月には終了して関東の栃木や千葉、茨城に切り替わり、8～9月は福島産がウエイトを高める。それと同時に入荷数量は増え、単価もこなれてくるため、量販期となるのが通例だ。しかし、今年6月の入荷動向をみると、例年24～25%を占める栃木産が20%足らず、10%以下になるはずの熊本産や愛知産がともに13%と、他の九州産や静岡産とともに単価も高い状況だ。

【背景】

トマトは他の果菜類とともに年明けから春先まで入荷減の単価高の状態が続いてきた。例年になく、熊本や高崎、佐賀、福岡などの九州産や高知産への引きが全国的に強かったという背景がある。この現象は、春先まで「関東産以外のものを」という需要サイドの要求によるもので、愛知産や静岡産にもその余波が及んで相場を上げた。6月の熊本産は入荷量で前年比8割増、単価は1割高、高崎産は前年の2倍で、単価が2割アップという状況を招いた。

【今後の対応】

こうした流れのなかで8月以降の入荷はどうなるのだろうか。本格化する福島産は、根気よく出荷を継続することは間違いないが、単価はあまり期待できないだろう。代わって、北東北の青森産や秋田産が昨年同様に出荷のボリュームを上げてくるだろうし、北海道産なども出荷が増えそう。福島産にとっては残酷な現象だが、小売筋は社会的義務として、数値をチェックしながらも売場を一部でも確保して、風評を払拭する努力が求められる。



キュウリ

【概況】
福島産は安定出荷で単価維持するか。期待される東北産地による協働宣伝

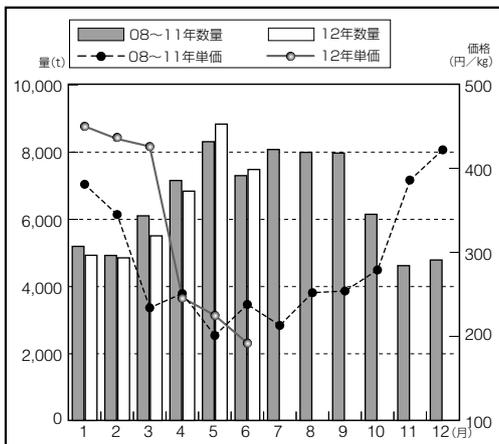
東京市場の入荷は5月、春までの宮崎産と高知産の終盤が埼玉などの関東産にほぼ切り替わり、年明けからの入荷減の単価高現象は解消した。ただ、6月は入荷量で前年比7%増ながら、単価は同6%と暴落ぎみに。主産地の埼玉がややシェアを落とす一方、福島産は1割を占めて単価は他産地に比べ悪くない。数量はまだ少ないものの、秋田や岩手、山形、北海道の各産地がそれ以上の単価を出しているのが気がかりだ。

【背景】

福島産の最盛期は7、8月でシェアは4割を超える。そのため、昨年の場合でさえも単価はそれほど安くなったわけではない。またまって安定した入荷には高単価がつく、という法則だ。特に仕入れをためらうケースもある小売用と違って、加工・業務需要には安定して入荷するものが支持される。しかし、全体的に入荷増が単価安を招いているのは、関東産や東北産が中心になり、小売向けなど需要の弾力性が低いからだろう。

【今後の対応】

今後、10月ごろをめどに関東産に戻り、さらに秋から西南暖地産が増えてくる間、東北産はどんな推移をしていくのか。福島産は単価はともかく、数量的に安定供給を続けるだろうが、他の東北産地が果たして……。だが、東北産地はここ2年ほど、夏場に協働して「キュウリビズ」を訴えて共同宣伝をしてきた。節電という世相を踏まえながら、キュウリ産地が相互扶助をしていこうとする精神は今年こそ試される。



今年の市場相場を読む

高知産が最後まで出荷し単価落とす。心配なのは関東産地の台風被害のみ

ナス

【概況】

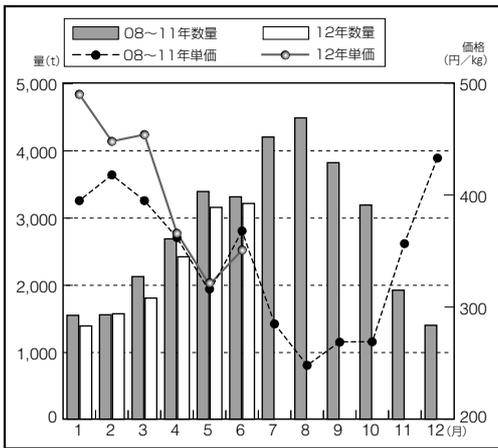
東京市場のナスのピークは7、8月で、関東産の露地ナスの最盛期に当たる。その前の6月は高知産の千両系ナスと長ナスが終盤で、群馬産を中心とした関東産に切り替わるのが通例だ。だが今年の場合、同月は入荷量が前年比13%増で単価は79%と弱含み。その原因は、高知産のシエアが45%と例年より5%以上高く、関東産がやや少ないことによる。単価の安い終盤の高知産が全体の足を引っ張った形だ。

【背景】

ナスの産地移動は関東が北限で東北産は入荷しない。ただ、主産地の群馬や栃木は北関東に立地しており、風評被害を受けやすい場所にある。10月以降、主産地が高知に戻るまでの間、ナスは関東産しかないため、今年の場合、入荷増は暴落に結びつく可能性がある。この夏の関東産の露地物は台風の影響を少なからず受けていることから、東北や北海道への出荷が減少傾向となれば、東京市場からの転送需要も発生し、強含みも予想される。

【今後の対応】

千両系のナスの需要は主に名古屋から東、関東から東北、北海道である。大きな産地は西南暖地や関東だが、関東以北では意外に地場物も豊富で、夏の露地物としてのナスはあまりひっ迫しない。しかし、秋冬には九州産の長ナスを含め、西南暖地の施設物が頼りになる。したがって、ナスに限り、福島産が代表する風評被害とそれに関する産地地図の塗り替えとはあまり縁がなさそうだ。気がかりは台風の影響がどう出るかだけだ。



ピーマン

【概況】

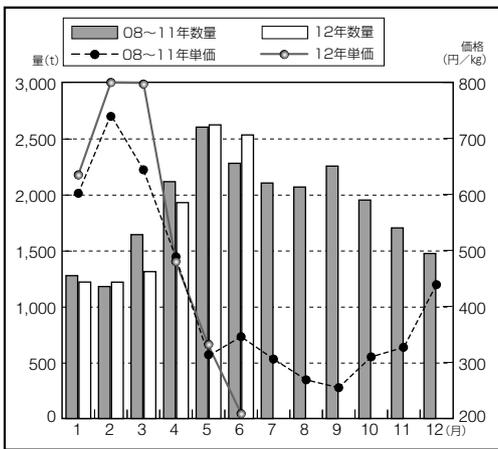
東京市場のピーマンは、年明けからの入荷をみると他の果菜類に比べ順調に推移してきた。6月には例年にも増して入荷があつて単価を下げたが、その原因は茨城産との切り替え時期にもかかわらず、高知や宮崎などの西南暖地産が重なって入荷したことによる。昨年の場合、6月は茨城産が9割を占めて圧倒的で、高知産は2%程度だった。それが今年は6%も残っており、早出しの岩手産や北海道産も高い単価で取引された。

【背景】

7、9月は茨城産をベースに岩手と福島が供給をまかなう構造だ。11月に西南暖地産が増えてくるまでは関東と東北の産地がシエアを占めるが、もとも夏場は単価の安いシーズンで風評が相場に現れにくい。一方、この時期は西日本に大きな産地がないため、関東や東北から供給を受けている。ただ、西日本の需要者には関東以北の野菜をできれば仕入れたくないというムードがある。この夏は東西で相場に大きく差が出る可能性もありそうだ。

【今後の対応】

今年、西日本では代表的な高冷地を擁する大分がタバコの廃作の跡地に夏秋ピーマンを拡大した。1000t規模の増産という情報もある。同県では同じく夏秋作のトマトも作付面積が拡大している。こうした動きは大なり小なり各産地に共通しているものの、関東・東北野菜の「代替」産地化という側面は否定できない。売れるものを作るのは原則だが、複雑な心境である。関東・東北の産地は一致団結し、宣伝・啓発活動に努めたい。



流通ジャーナリスト

小林 彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オピニオン情報紙「新感性」月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」、「レポート青果物の市場外流通」、「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。

茨城産に西南暖地の残量がかぶる。九州に出現した新たな夏秋産地